



英知総動員のとき

桑野 巍

いま人類は地球の表面にへばり付いて、誰もが「生きる」を繋いでいるように思える。地球上の人口はつい50年ほど前は約30億人だったが、あれよあれよという間に現在約70億人に迫り、2050年には91億人に達するという予測もある。人口増加時代が続いている。日本の場合、大正時代に約5,000万人台だった人口はいま1億2,700万人に達しているがピークは過ぎた。日本の人口はこの先徐々に減っていく。人口の減少傾向にそれほど気を遣う必要はなかろうが、食糧をはじめエネルギー資源、環境問題など放置するわけにはいかない。日本だけのことを考えると、高齢化社会が猛烈な勢いで進むといいながらも長寿社会を迎えているのは実におめでたい。

昨年の女性の平均寿命86.39歳が26年連続で世界一位を維持していること、男性も79.64歳と5年連続で過去最高を更新したというから二重におめでたい。日本は恵まれた国といえる。何よりも平和国家であること、医学薬学の進歩、行き届いた自身の健康管理、家庭やオフィスの快適な環境などが長寿の秘訣だろう。

一説では、人間の寿命は男800年、女400年という超楽天学者が米国にいたという。老いや病の原因になるたんぱく質の変化を完全に防げば不老不死が実現するというのだ。「そんなに長生きしたいか。若い人たちの邪魔ではないか」という高齢者の声もあるが、人間ドックとか企業、地域ぐるみの健康チェックなど予防医学システムが整った都市部の住民は将来も長寿の楽園に住む可能性を持っているということか。

もっとも日本の医学者は「現在学界では人間の寿命は100歳から110歳辺が通説」という。生物の寿命については諸説あるようだが、大勢は「長寿記録はまだ延びる」で一致しているとも聞く。ただ食糧危機、エネルギー資源の枯渇、環境破壊など懸念材料が山積みで、これらの諸問題は人間の長寿や人口問

題と切り離すわけにはいかない。

私のスクラップによると、米国のポール・エーリック博士（当時スタンフォード大教授）が、いまから60数年前に説いていた「地球の均衡を取り戻し、資源争奪と汚染をこれ以上進行させないためには、人口のゼロ成長と経済のゼロ成長を同時に採用する必要がある」と述べていたことを思い出す。彼は地球上の人口が増え続けると、将来地球の広い海にふたをして全地表に2,000階建てのアパートを建てなければ収容できないという予測も語っていたのも興味深かった。

米国人の場合、人間約70年間の生涯に水9,880万リットル、ガソリン7万9,800リットル、肉類1万ポンド、牛乳とクリーム2万8,000ポンド、学校資材5,000～8,000ドル、衣類6,200ドル、家具7,000ドルなどを消費するという推計計算を出していたがなぜか小麦とか野菜、果物は入っていなかった。米国は生活水準の高い国を誇っていたということか。開発途上国といわれる諸国の統計は手元にはないが、米国並みに消費水準を上げれば食糧、エネルギー資源などすぐに底をつくだろうから未来社会が思いやられるといえそうだ。

日本はいま国難をかかえている立場にあるが人口減少国の仲間入りして意気消沈している。人口減少が幸なのか不幸なのか、その見極めもつけられない。この先福祉充実の文化国家を目指すだろうが果たして高福祉低負担社会を維持することは可能なのか。長寿社会の中の人口問題は産業経済の成長路線や労働問題、教育問題と関連するが、本当の豊かさを長続きさせることが出来るかどうか、いま新しい船出の時を迎えている。日本を取り巻く環境は厳しいが指導層の人たちは老若男女の英知を総動員して難局を乗り切ってほしい。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）